

## ヤツボシシロカミキリ, その後

小西 和夫<sup>1)</sup>

### はじめに

2018年6月に初めて兎和野でヤツボシシロカミキリ *Olenecamptus octopustulatus* (Motschulsky, 1873) と出会い、「バラの妖精」のような可憐な美しさに魅了された。以来、その特異な分布に関する文献やネットの記事を渉猟し、新たな生息地や食樹、生態に関する情報の収集に努めてきた。2018年11月に刊行された「広島県のカミキリムシ」には、中国山地の本種の採集地や生態について具体的な記述がまとめてあり、とても参考になった。また鳥取市で蛾の研究をされている方のブログでは、標高30m付近の灯火に飛来した「妖精のようなカミキリ」として紹介され、本種の新たな分布地や走光性について、貴重な情報を得た。

### フィールドにて

今季は、兎和野を含む氷ノ山後山那岐山国定公園内の氷ノ山から扇ノ山周辺の山域、丹後、京都北山から滋賀の比良山系などで「バラの妖精」との再会を果たすべく、妖精の守り人気分でも夢は野山を駆けめぐっていた。

ところが、本種の発生時期と重なる6月中旬に4人目の孫が産まれるという。6～7月のカレンダーは刻々と埋まり、長期間の自由な遠征は望むべくもない。娘が無事に出産を終え、孫の守り人の役目が一段落した6月21日、ようやく兎和野に赴くことができた。

まずはヤツボシシロカミキリが兎和野で継続して発生しているのか、そして生息範囲がどの程度の拡がりを持つのかを確認しなくてはならない。幸い昨年の発生木と思われる樹は健在で、10時半頃に到着して生葉を掬うと今年も網の中に可愛いらしい小さなペアが入った。一年ぶりの妖精との再会に胸が熱くなる。あと何回出会えるのだろう。これで本種がこのツシマナナカマド(図2, 註; 以下ナナカマドと表記)を宿主として生息していることが確認できた。次は、近隣のナナカマドを掬って生息エリアの範囲を探らねばならない。しかし樹勢の良い若木を掬っても、何も入らない。昼食後に再び発生木に戻ったのが13時20分、生葉を掬って朝より大きな1個体を確認した。その後、数十メートル先の枯れ枝の多い数本の樹叢で、発生木以外では初となる、やや大きなヤツボシシロカミキリ一頭が網に入った。

次の日は以前ナナカマドを見た記憶がある大江山の稜線へと足を伸ばした。京都府初の新たな生息地を探すためだが、夜来の雨で生葉はぐっしょりと濡れ、掬うたびに網は重くなる。稜線付近には兎和野のような草臥れた高木は少なく、若くて樹勢の良いものが多い。

昼過ぎには、3人目の孫が高熱!との一報で急ぎ帰路に着く。

病院や保育所への送迎等、孫守りの任務から次に解放されたのが梅雨の晴間の6月25日。「精霊の守り人」

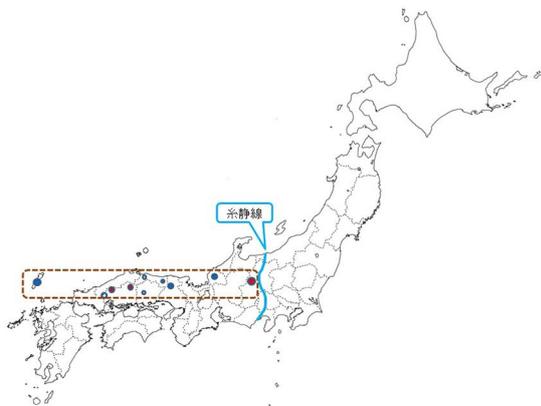


図1 ヤツボシシロカミキリ分布概念図。



図2 (a) 発生木のツシマナナカマドの葉裏(兎和野), (b) ナナカマド(山梨県富士山四合目)。 註) ツシマナナカマド *Sorbus commixta* var. *wilfordii* は、ナナカマド *Sorbus commixta* Hedl. の変種 (varietas)。奇数羽状複葉の葉裏が粉白色から白緑色でやや幅広、通常7～11(13)葉で基本種の9～15葉に比べて少なく、北陸や中国地方、対馬に分布。日本海型で地域性が強く、標高の低い地域(鳥取では砂丘付近)にも自生。ただし、変異は連続的で種レベルでは基本種のナナカマドに含むとされる(村田, 1991)。

<sup>1)</sup> Kazuo KONISHI 兵庫県西宮市



図3 ヤツボシロカミキリ (2019年6月21日).



図4 ヤツボシロカミキリ (2019年6月21日).



図5 ヤツボシロカミキリ (2019年6月21日).



図6 シコクヒメコブハナロカミキリ (2019年6月25日).



図7 フタコブルリハナカミキリ (2019年6月25日).



図8 ナナカマドの葉裏に静止するヤツボシロカミキリ (2019年7月5日).



図9 ルリカミキリ (2019年7月7日).

は短槍を使うが、妖精の守り人は長竿を携え、早朝から氷ノ山に出征。掬うのは氷ノ山の東の麓、林道付近のナナカマドである。

森の入り口には桂の古木があり、ヒコバエの上にチョココンと止まって「桂の番人」シコクヒメコブハナカミキリが迎えてくれたが(図6)、この日も本命は空振り。ガマズミの花上からメタリックブルーの鎧を纏った衛兵、フタコブルリハナカミキリに見送られて帰還(図7)。

その後も風邪や手足口病を患う孫を看ながら天気図を睨み、本種の発生時期としては今季最後となる3日間の遠征に出た。初日の7月5日は前回のコブハナ2

種との出会いにあやかろうと、ムナコブハナカミキリを求めてハチ高原をめざす。

赤いコブハナには振られたが、昼過ぎに兎和野に着き13時50分、いつもの発生木でさらにヤツボシシロカミキリ1頭を得た。撮影後にリリースすると枝葉に沿ってスーッと飛び、葉裏に止まった(図8)。意外に敏捷でスムーズな飛び方で、樹林の中では天敵にも見つかりにくい印象を受ける。しばらく動かないので注視していたが、小葉に穴状の食痕は見られたものの、本種の後食行為は観察できなかった。

兎和野では、鞘翅の4対の白斑にタカサゴシロカミキリのような変異は少なく安定しているが、個体間で白斑の形状や体色の濃さに微妙な変異があり、体長は9~13mmと幅がある。そしてこの地では6月中旬から少なくとも7月初旬頃までは成虫が発生・活動しているようだ。

高い確率で成虫を観察できるので、この地で安定的に発生していることは確かだが、発生エリアがどの程度の拡がりを持つのかを確かめるのは案外難しい。

翌6日は、かねて目星をつけていた扇ノ山の麓の高原をめざした。初めて行く「畑ヶ平」付近にはブナの自然林もあり、兎和野と似た雰囲気のアナカマドを掘り続けたが、昼からは雨となってこの日も成果なく投了。今年は雨が多い。

最終日の7日は氷ノ山の北側の林道沿いに、霧雨の中アナカマドを掘った。重い網に入ったのは、バラ科を食樹とする鮮やかな紫袴の女官、ルリカミキリ(図9)。昼すぎには、またしても孫が発熱!との報せで、今季の竿を納めることにした。

下山途中でふと目に入ったアナカマドの前に車を止め、もう一度竿を伸ばして生葉を掬うと、白い網の中に小さな薄茶色の影が動いた。一瞬息を呑んだが、中から現れたのは、あの「桂の番人」。近くに桂の古木があるのだろう。あたりは次第にガスに覆われ視界も悪くなったので、ここで竿を措き、網を畳む。

幻想的な白い森に立ち込める湿った大気には、妖精たちの気配とともに桂の甘い香りが漂い、疲れた心を癒してくれた。

#### 参考文献

- 広島虫の会 カミキリ研究グループ編, 2018. 広島県のカミキリムシ. 広島虫の会.  
「灯火巡り 2012.6.12」『モスはモス屋』(ブログ)  
<http://mothra.izumoga.com/?page=3&cid=17>  
村田 源, 1991. 変異の問題(学名の使用と標本の保存) — 分類学の立場から. 雑草研究, 36 (4): 307-310.